# T雄の学校生活（二）

浜田駒子

T雄は、今までに、父の仕事の都合で三回転校した。

**○東京都大田区の小学校に入学**

一年生の七月大阪へ転校。

**○大阪市西区の小学校**

大阪駅に近い問屋街の真中の小学校であった。父兄の職業の多くは老舗か貸ビル業で、家の職業を継げば、一生食べるのには困らないという家庭が多かった。したがって「ええしのボンボン」が多く、PTAでは、しきりにわが校の子どもは気力に欠けるといっていたが、母からみると、素直なおっとりした子どもたちばかりであった。学校から一分くらいしかかからないところに家があったので友だちが毎日、五、六人は遊びにきていた。

都心のビル街に住む人が年々少なくなるので、児童数が少なく全生徒に目がとどき、行儀よく、とりわけ健康管理がよくゆきとどいた学校であった。

三年生の九月、父の転勤で東京へ帰る。

**○東京都町田市の小学校**

ここでも東京都かしらと思われるほど東京もはずれの山の上に住まいがあった。父の会社の分譲住宅である。山の上には家が七軒。あとは宅地造成されたまま、売れない土地にススキが生えていた。

学校は山をおり四十分歩いたところにあった。田舎の学校である。運動場がとても広い。

家の前と横は林で、木にのぼったり、枝や葉っぱで秘密基地を作ったり、子どもを育てるにはまことによかったが、風当たりがつよく、台風でぽっかり屋根がとれてしまった。そのショックは

子どもにとって大きく、少し風がふくと妹はランドセルを背負って母のそばを離れない。実家に泊まると、「ここは平らなところに建っているから安心して寝られるわ」というので、ちょうど、父が会社をやめるのと同時に家をかわった。

四年生の三学期である。

## ○神奈川県相模原市の小学校

家は平らな住宅地に見つけた。

学校は二十分ほどで行ける。緑化モデル校に指定されているので木が多く、小さな林もあり、敷地の広い学校である。このあたりは急に開けてきたので、転校生が多く、全校児童千名を越えた。

毎年、教室が不足し、校舎は木造にプレハブや鉄筋をつぎ足している。

小学校の卒業までの二年間、この学校で過ごした。

### ◆成績

都会の小学校は、勉強に追いまくられて、遊ぶ時間がないと新聞やテレビで報じられているが、本当だろうか。

T雄のクラスはドリルはあまりやらないし、宿題も少なく、のんびりしたものである。皆が勉強しないから点数の競争がない。したがって好きな本が存分読めるのである。

家にいる間は、ほとんど本を読んでいるし、少しの間でも活字を目で追いたい子どもで、朝、ふとんをたたんでいても手を休めてマンガを読んでいる、机にカバンを取りに行ってちょっと読んでいる、くつのひもを結んで新聞を読むといった具合。

社会でも理科でも復習しない。時間に教わったことは頭の中に入っていて、学校のテストには困らないらしい。

宿題がよくでるのは、家庭科。形に仕上げなければならないからいっしょうけんめいやるが、まつり縫いを10センチするのに四十分くらいかかる。

成績は1から5の五段階でつけられる。

相対的な評価だから、父も母もそれに神経質になっていない。

「ぜひ5になるように」といった覚えはない。が、T雄に対する両親の期待は大きく、口に出さなくても、ある程度の成績をきめてかかっているところがある。「こういうのはT雄にとって負担でしょうね。気をつけなければ」と父と母でたびたび話し合う。

妹の成績に対しては、T雄に対するような期待はない。期待がないから成績が少しでもあがるとびっくりしてしまう。

妹の成績があがった時、妹には、

「へえ、お兄ちゃんと同じになったの。よくがんばったのね。びっくりしちゃった」

T雄には、「相変わらずで感動がないわね。これで何かどっとさがるとびっくりするんだけど」と茶化す。

六年の二学期、図工の5は感激であった。

T雄は幼稚園へ入る前から「お絵かき」は苦手であった。〔三十六年の「幼児の教育」七号、十号にくわしく記録してある〕

父が油絵をかくので、「僕はお父さんのように上手にかけない」というのが、最初のつまずきだった。幼稚園の間、何とか好きにさせたいと、幼稚園の先生も考えてくださるし、家庭でも努力した。

学校に入って一年から五年まで「僕は絵が下手で書けない」という気持に支配され続けた。

五年生の夏、父の勤める学校のスケッチ旅行に家族で参加した。絵になるところを求め、山の滝まで歩いた。

父も母も入口近くで描いたが、T雄はもう一人の引率の女の先生と数人の学生といっしょに山あいの深いところまで行った。

午前中から皆一斉にかきはじめた。

T雄は少し描いて女子学生相手に笑い話をしたり、クイズを出したりして遊んでいるのが母のところから見える。

午後になって学生たちは仕上がり、こちらのグループと合流するために続々と帰って来る。

T雄も帰ろうとして、先生に、「まだ、まだ」といわれているらしい。

母も絵がかけないのでよくわかるのだが、絵のかけない人は興味がないから物をよくみない、かくのもぞんざいである。ぞんざいだから下手にかけておもしろくない、おもしろくないからよく見ない、これのくり返しである。しかし、その女の先生は、

「純粋な心と目をもっていれば、誰でも絵がかける」という信念の持主だからきびしい。

T雄は先生と二人きりになってしまい、絵をかかなければ帰してもらえないので二時間ほどかくことに没頭した。

今までにない、ていねいな絵がかけた。

これで、絵をかくのが、おっくうでなくなったらしい。

「このごろ、絵の時間も困らなくなったよ」といっていた。

六年になって秋の絵画展があった。全校一斉に写生に出かけ、作品を無記名にして通し番号をふり、全員の先生方の投票で三名選ぶ。その中にT雄の絵が入ったのである。

セメント工場の絵である。

五、六年生になって、子どもに対する受け持ちの先生の評価が固まってしまったような気がする。

社会、理科はあまりないが、国語の聞くテストや算数で計算ちがいなどしてとても悪い点をとってくることがある。

クラス全体が低い点なのかもしれない、また普段の態度、理解度も入るらしく、通信簿の評価は変わらない。

「ああ、T雄が、ボカをやったな」と、先生が思って見逃がしてくださるように思える。隣りのクラスではテストの点をキチンと表にして95点以上は5、85点以上が4、などとあり、自己の平均点が何点か、を明記される。

T雄はそういうところへ入ったら、今のようにうらかにして

はいられないだろう。

逆に図工の評価では、絵のうまい子はきまってしまっている。

絵の良い悪いは受け持ちの先生の主観できまる。無記名で、全部の先生に選ばれたので、受け持ちの先生の評価がちがったらしい。通信簿の評価が4から5になった。「一年生の時から、図工だけまだ5をもらったことがなかったから、うれしいなあ」とT雄が何度もいう。絵がかけないという劣等感からぬけ出せてよかったと母は思っている。

## ◆児童会会長

六年生の一学期、児童会会長に選ばれた。たくさんの仕事の中で、たびたび、演説する機会の多いのには驚いた。小運動会や学校の行事など。

交通安全、市民総ぐるみ運動推進大会で、児童代表として子どもの立場から三分間演説をするようになどといわれる。

演説の文を練り、書くのに案外時間がかかる。

まだ、こうして時間に余裕のあるのはいいが、突発的に起こることがある。

夕方、おそくまで運動して帰り、早く寝たいといっている時、給食のおばさんが亡くなったから、明日、告別式に弔詞を述べるようにと電話がある。給食のおばさんは、毎日会ってはいるが、話をしたことがない人が多い。

小学生がきまり文句を述べるほどいやなものはないとよく話し合っているので、具体的な材料がなくて困っているらしい。

母が話し相手になってあげる。

「どんな人だったの」「太った人」

「毎日、あなたたちが給食とりに行くと、何かしたり喋ったりするんでしょ」

「入り口に仁王立ちになっていてね、〃みんな揃ったか、揃ったら入りな〃っていうんだよ。〃ホラ、こぼすよ、気をつけな〃っておっかないおばさん。一度は容器の取手がこわれてひっくり返っちゃったのに、持ち方が悪いっておこるんだよ」

「なくなった方に〃あなたは、こわいおばさんでした〃ともいえないしねえ。でもそれしかおばさんのことを覚えていないならそこを感謝して書けば」

文を書くのも勉強になったし、人の前で喋ってもあがらなくなったといっている。

## ◆水泳

この学校には水泳指導に熱心なI先生がいらっしゃった。五月も十日を過ぎると、水泳部員をぼつぼつプールに入れる。八月十日ごろの記録会までに三か月、みっちり泳がせるため、一日も早く水に入れるのである。

六阪の小学校では雨がふった日や、水温を計って低い日は水泳

中止になったが、この水泳部は始まったら雨がふろうが曇っていようが毎日泳ぐ。

I先生以外の先生は、放課後、校務がおありなので、なるべく早くすませて子どもを帰そうとなさる。子どもたちは先生のお気持が移ってどうもやる気がなくなるらしい。

I先生の練習はきつい。そのきびしさに、子どもたちはついて行く。I先生は三十名ほどの一人一人の記録を実によく覚えていらして個々に指導をなさる。

「六年の夏休みは私に預けてください」と五年生の時から頼まれているので、毎年行く一週間の牧場の手伝いも、家族旅行も水泳大会後にまわした。夏休みも休まず、朝九時から夕方の六時までプールにつかっていた。学校のプールでない時は相模原市営プールで練習があった。公認の五十メートルプールである。それは昨年の夏、畑のまん中にでき上がった。学校から子どもの足で三十分くらい歩く。畑の道を、水泳パンツとタオルをもった十数名が道草をしながらワイワイ歩いて行くのである。落書きをしたり、追いかけっこをしたり。

「〇〇〇子、相模原に来たる」とかいてある電柱のポスターをT雄がはがしたら、次からそこを通るたびに、「T雄――」と、皆が声をそろえてT雄をみるという。

市営プールのまわりは畑だから店は一軒もない。そこで屋台のおでん屋ととうもろこし屋がくる。いつもお弁当と入場料二十円しか持たせないので買えない。プールの屋上にあがるとその匂いがしてくる。「たべたいな――」と思うらしい。

一度、午前中弁当なしということだったので持たせなかったら先生のご都合で午後もやることになり、誰もお弁当を持っていなかった。I先生が自腹を切っておでん十円のを三こずつ買ってくださった。

I先生の指導を助けるために「先輩」とよばれている高校生のおにいさんがいる。

「先輩がいっしょうけんめい泳いだら、とうもろこしを一本ずつ買ってやるというので、いっしょうけんめい泳いで買ってもらったんだ」

水泳大会は、この市営プールで行なわれる。

他の学校は数名なので、先生方の乗用車にのってやってくる。バスで、あるいは歩きで、という学校もある。

わが校は、十数名なので、水泳部の父母会の会長さんが、自分の工場の三輪トラックで運んでくださる。

トラックで人間を運ぶのは違反だから、巡査にあわないように、また、道がデコボコなので選手を放り出してはいけないと、会長さんは冷汗をかきながらソロソロ運転しているのに選手たちは大きな声を出して喜んでいる。

わが校は、練習量が物をいって一同断然強い。I先生はつねづね、「色の黒さで勝負しろ」

黒いということは、それだけ練習していることである。まっ黒けは皆、わが校の子どもであった。

「人に勝つより自分の記録に勝て」ともおっしゃっている。

頭をならべて泳いで来ても、ゴール前三メートルになると必ずわが校の子どもが出てくる。最後のがんばりがきくのである。

大会には、父も母も妹も弟も応援にいく。父が中学生の時、角力の大会に両親の顔がみえると、とても嬉しかった、というのでなるべく家中で行く。

大雨がザアザア降っても、試合は水の中だから休むことなく、応援はずぶぬれである。寒い方が記録が出しやすいといって、T雄は自分の記録をのばした。

「T雄はどっちかというと気の弱い方だから」というと、他の父兄の方々が、「弱くないですよ。大きな大会のたびに記録がのばせるというのは、気が弱くてはできませんよ」といってくださり、親バカ丸だしで、「そうでしょうか」とニヤニヤしてしまう。

わが校は成績がよく賞状が五十枚をこえた。雨にぬれないように大きなビニールの袋を用意して、賞状をていねいに持っていてくださるのは郵便局長さんである。

四十四年三月一日、日本水泳連盟から、全国小学校のなかの水泳優秀校としてわが校は表彰された。

この水泳で得たものは、常識的に根性というのであろうか。

母は根性というより、どんなに苦しくても、I先生を信頼してついて行く素直な心がきびしい練習にたえさせたと思っている。

これは水泳部の全部の子どもに見られるもので、小学生らしい美しさだ。

T雄自身は、

「いっしょうけんめい練習さえしておけば、いざという時あがらずに、練習の時以上の力が出せる」ということが実感として身についたといっている。

（つづく）

**幼児の教育** 第六十八巻 第六号
六月号 © 定価八〇円
昭和四十四年五月二十五日印刷
昭和四十四年六月一日発行
東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行者 津守 真
112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所 日本幼稚園協会
東京都板橋区志村一ノ一一
印刷所 凸版印刷株式会社
101 東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所 株式会社 フレーベル館
振替口座東京一九六四〇番
◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします